

第 35 回目 新しい人を身に着る (7)

はじめに

●前回は、「神に愛されている子どもらしく、愛のうちに歩みなさい。」ということで、現代の三大聖人と言われる方のお話をしました。一人目は、神の愛の宣教者会の創設者マザー・テレサ。彼女は宗教という隔ての壁を越えて神の愛を示しました。二人目は、テゼ共同体の創設者ブラザー・ロジェ。彼はカトリックとプロテスタントの隔ての壁を越えた共同体を造ろうとしました。三人目は、ラルシュ共同体の創設者ジャン・バニエ。彼は知的障害というハンディをもった人とそうでない健常者との間にある隔ての壁を越えた共同体を造りました。

●イエシュアは「貧しい者」の友となりました。貧しい者の友となるということは、人の深みにまで触れることを要求されます。それゆえ、恐れゆえにさまざまなハンディをもった人は社会から隔絶されてきました。なぜなら、彼らの存在は私たちの弱さ、愛の貧しさを突きつける存在だからです。しかし逆に、ハンディを持った人の存在、そしてそうした人々と交わることは、実は、健常者とされる人の貧しさを豊かにする道なのです。ジャン・バニエはより豊かなのちの世界をもたらす彼らの「低さの価値」を訴えることを通して、今日の競争社会、物質的に豊かな社会が、どれほど非人間的なものを訴えたのです。これら、現代の三大聖人が示している道は、「神に愛されている子どもらしく、愛のうちに歩みなさい」という実践版です。しかも、その道は、イエシュアの愛を知り、そのイエシュアの愛にとどまりつづけることを通してでなければかかわることのできない世界ではないかと思えます。

1. 暗やみと光

●さて今回、使徒パウロが私たちに示している歩みは「**光の子どもらしく歩みなさい**」ということです。「光の子どもらしく歩む(生きる)」とはどういう歩み(生き方)なのでしょう。このことについて考えてみたいと思います。テキストは、エペソ人への手紙 5 章 8 節のみに絞ってお話したいと思います。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

●カエルの子は「おたまじゃくし」、ニシンの子は「数の子」、鶏の子は「ひよこ」です。では、光の子どもは？それは「イエシュアにある者たち」「キリストを信じる者たち」です。ここでの「光」とは神ご自身であり、イエシュア・ハマシアツハ(イエス・キリスト)です。

●カエルの子は「おたまじゃくし」、ニシンの子は「数の子」、鶏の子は「ひよこ」－これは当たり前のことです。カエルの子が「ひよこ」であることは絶対にありません。ニシンの子が「たらこ」であることも決してあり

אגרת שאול אל האפסים

ません。ところが、絶対にあり得ないことが現実起こったのです。5章8節のみことばをもう一度見てみましょう。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。」—これは、きわめて単純明快、かつ大胆な宣言だと思いませんか。

●あなたがたは、「以前は、暗やみであった」—暗やみの中に生まれ、暗やみの中に生きていた。しかも、暗やみの性質を持っている者であった。「しかし今は、・・・光となった」—光の中に生まれ、光の中に生き、しかも光の性質を持つ者となったというのです。「暗やみと光」は全く相反する世界であり、全く性質の異なる世界です。暗闇の世界に生きていた者が、光の世界に招かれ、光の世界に生きる者となった。それはひとえに、メシアなるイエシュアにあって実現し得る、神の奇蹟そのものです。

◆宇宙には「ブラックホール」という空間があるそうです。ひとたび、そのホールに入るならば、すべての物質がどんな力をもってしても脱出できない空間だそうです。聖書の言う「暗やみ」もそうした意味合いで語られています。単なる暗いということではなく、力をもって支配している暗やみの世界です。私たち人間の力では到底抜け出せない力をもった「ブラックホール」のような世界—それが「暗やみの世界」です。しかし神はそうした世界から私たちを救い出してくださる方です。「暗やみの压制・・・から、愛する御子ご支配の中に移して」(コロサイ 1:13)下さる唯一の方です。



2. 光の源泉であるイエシュア

●ヨハネの福音書では世を照らす「光の源泉」について語られています。その第1章で、ヨハネは「すべての人を照らすまことの光が世に来ようとしていた。」と伝えます。「すべての人を照らすまことの光」とは、神の御子イエシュアのことです。しかもその方が世に来られた時、「世は、この方を知らなかった。」と記しています。なぜなら、世は神を知らない世界、神を認め受け入れようとしない世界です。神の支配を嫌い、神を拒絶し、神を排斥しようとする世界です。そうした世界にまことの光である方が来られたのです。

●暗闇は光には勝つことは決してできません。どんな小さな薄明かりであったとしても、その明かりは闇を照らすことができるからです。私の携帯の光はごくわずかな光です。しかし真っ暗な家の中でもその明かりで歩くことができます。鍵穴を探すことができます。暗闇はわずかな光にさえも打ち勝つことはできないのです。光は尊いものです。その光の源泉は神ご自身です。

●ヨハネ1章はヨハネの言葉ですが、ヨハネの福音書8章にはイエシュア自身が自分のことをこう述べています。

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(8章12節)

אגרת שאול אל האפסים

このことばが語られた背景となっている出来事があります。それは、姦淫の現場で捕えられたひとりの女がイエシュアの前に連れ出された出来事です。律法に厳格なパリサイ人たちがこの女を連れて来て、イエシュアの前に立たせてこう言いました。

「こういう女は石で打ち殺せ、とモーセは律法の中で命じている。ところで、あなたはどうか考えるのか。」

●これは律法学者やパリサイ人たちがイエシュアを試して、告訴する口実を得るためにそうしたことが記されています。本来ならば、この女のしたことは倫理的、道徳的には赦されることができないことです。律法学者やパリサイ人たちの目には、イエシュアの語っていること、やっていることが律法から逸脱しているように思えたのです。もしイエシュアがここで律法を破るようなことを言ったとしたら、すぐにも神を冒した罪で告発することができます。イエシュアは身をかがめて、指で地面になにかを書いておられましたが、彼らの執拗な問いかけに対して、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と言われました。するとどうしたことでしょう。これを聞いた者は年長者から始まって、ひとりまたひとりと立ち去ってしまったのです。そしてイエシュアと捕えられた女が残りました。残ったイエシュアだけがこの女に石を投げつけることのできる資格のある者でした。ところが、イエシュアは女にこう言いました。「だれもあなたを罪に定める者はいなかったのか」「はい。だれもいません。」そこでイエシュアは女に言いました。「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。これからはもう罪を犯してはなりません。」

●自分の中にある暗やみに気づかないと、神の聖なる律法を用いて人をさばいたりするだけの者となってしまいます。神の律法の本質は、私たちが生かす以前に、私たちのうちある暗やみの事実を照らす神の光なのです。律法をもって、人をさばくために与えられたものではないのです。そのことに気づかされた者たちが、その場を離れました。そして残された女に向かってイエシュアは「わたしもあなたを罪に定めません。今からは決して罪を犯してはなりません。」と言って、彼女を律法によってさばくことなく、暗やみの世界からいのちの光の中に招かれたのです。そして、こう言われました。

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ 8:12)

●使徒パウロもイエシュアとの出会いによって「天からの光」に照らされました。自分は間違いないことをしている。正しいことをしている、人と比べて神に熱心だ、とっていました。人と自分を比べるならば、誇るところを多く持っていると思っていた。ところが神の光に照らされたとき、目からうろこが落ちたのです。自分の本当の闇の現実を知らされたのです。それから彼は変わりました。

「いのちの光」とは何でしょうか。「いのちの光」を持つとはどういうことを意味するのでしょうか。ヨハネが書いた手紙(第一)の中にそのヒントがあります。いくつかの箇所を抜粋しながら、「いのちの光を持つ」ことがどういうことかを見てみたいと思います。

①「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。」(Iヨハネの手紙第 1:5)

אגרת שאול אל האפסים

②「もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち・ます。」

③「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなおやみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。」(同、2章9～10節)

●以上のように、「光の子どもらしく歩みなさい」という意味は、教会の中に招かれた者たち同士が、さばきあうことなく、愛し合うことです。これまで多くの教会が神の律法によって自分たちの罪に気づくことなく、隔ての壁を作り、自分たちの聖書の立場はこうであるという、この解釈こそ正しいという壁を作りながら、さばきあい、憎みあってきました。プロテスタント教会が多くの教派を持っているのは、聖書に対する解釈の違いのゆえです。聖書に対する解釈が真理だとしても、暗やみの力はそうしたみことばの領域にも働いてきます。そして自分たちこそ正しいと思わせることによって、そこに大きな隔ての壁を建てさせます。それが暗やみの支配者の戦略です。歴史の中での聖書における真理の発見は、私たち人間のプライドによって多くの争いを引き起こして、傷つけあい、溝をつくってきました。それゆえ、もう一度、私たちが光の子とされたことを再認識する必要があります。教会の外に対してではなく、教会内において光の子として生きることです。ヨハネは言いました。「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなおやみの中にいるのです。」と。しかし反対に、「兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。」とあります。

●「いのちの光」、それは私たちの真の暗やみである罪を照らします。ヨハネの言う暗やみとは、あらゆる愛のかかわりを断ち切ろうとする力なのです。しかし、いのちの光、いのちへと導く光、愛のいのちのかかわりをもたらす光は、自分の罪に気づいて、互いに赦し合い、互いに交わりを保とうとする力です。しかも、つまづかない力であり、同時に、人をつまづかせることをさせない力です。

●教会の中でも、自分の意に反して、いがみあったり、憎みあったり、受け入れずに拒絶したりすることが起こったりするかもしれません。しかし、私たちが光の中にとどまるならば、決して、つまづくことがないのです。自分の罪を赦して受け入れて下さった神の「愛の光」、「いのちをもたらす光」—そんな光の中に招かれたことを感謝しましょう。

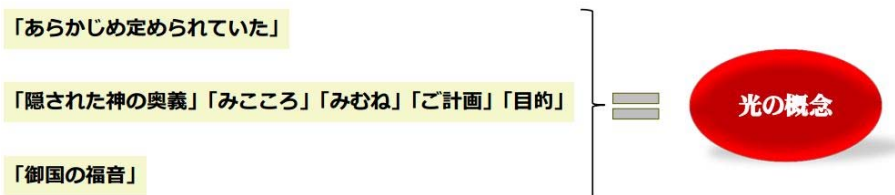
●「光の子どもらしく歩みなさい」—その第一回目の今回は、キリストのからだである教会において、光の子として生きることはどういうことかについて学んでいます。次回は、世に対して、「光の子どもとして歩む」ことがどういうことかを考えたいと思いますが、いずれにしても、「光」は暗闇を照らす光源としての光だけでなく、温かい熱をも与えます。冷たいものを温め、堅いものを柔らかくしていきます。教会においても、世においても、自分とかわるものにそんな恵みを与えていくのです。キリストにあるならば、私たちは神の愛の光、いのちをもたらす光そのものです。そんな光のシャワーとなるように、光の子どもらしく歩むことができるように、主に祈りましょう。

3. 「光」の概念についての新たな理解

●この部分は、2015年11月に開かれた理解です。詳しくは、「牧師の書斎」-「光」についての神学的瞑想-参照のこと。このことを知るために、エペソ人への手紙の1章1~14節を取り上げてみたいと思います。「天からの光」に照らされたパウロが、「光」という言葉を用いずに「光」についての概念を注解しています。

- 1 神のみこころ(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)によるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- +3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちに祝福してくださいました。 +4 すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。 +5 神は、みむね(「ユードキア」 $\epsilon\acute{\upsilon}\delta\omicron\kappa\iota\acute{\alpha}$)とみこころ(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)のままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子(=「養子」、しかし花嫁であれば父から見て子の立場にある)にしよと、愛をもってあらかじめ定めておられました(「プロオリゾー」 $\pi\rho\omicron\omicron\rho\iota\zeta\omega$)。
- +6 それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
- +7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- +8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、 +9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになった(発案してくださった=「プロティセマイ」 $\pi\rho\omicron\tau\iota\theta\epsilon\mu\alpha\iota$)みむね(「ユードキア」 $\epsilon\acute{\upsilon}\delta\omicron\kappa\iota\acute{\alpha}$)によることであり、 +10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。
- +11 この方において私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画(「プロセシス」 $\pi\rho\acute{o}\theta\epsilon\sigma\iota\varsigma$)のままをみな行方目的(=意志「ブーレー」 $\beta\omicron\upsilon\lambda\acute{\eta}$)に従って、私たちはあらかじめこのように定められていた(「プロオリゾー」 $\pi\rho\omicron\omicron\rho\iota\zeta\omega$)のです。 +12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。 +13 この方においてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。 +14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐこと(=相続財産)の保証(=手付金)です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

●ここには重要なことばが数多くあります。その中で最も重要なのは「あらかじめ定められていた」(=世界の基が置かれる前から)というフレーズです。「あらかじめ定められていた」と訳された「プロオリゾー」($\pi\rho\omicron\omicron\rho\iota\zeta\omega$)は新約聖書で6回(使徒4:28、ローマ8:29,30、Iコリント2:7、エペソ1:5,11)だけですが、当然ながら、すべて時制はアオリスト(過去)です。目を通しておくべき重要な箇所です。



●ところで、何が「あらかじめ定められていたのか」と言えば、それは神の「みこころ」として、神の「み

אגרת שאול אל האפסים

むね」として、神の「ご計画」として、神の「目的」として定められていた、神の「隠された奥義」としての事柄です。しかもその奥義は、神が御子イエシュアによって、キリストを通して、キリストのためになそうと定めている事柄です。これが「光」のことばで言い表わされている事柄です。エペソ書 1 章には「光」という語彙は一度も使われていませんが、そこには創世記 1 章 3 節の「光」について語られているのです。使徒パウロがエペソの教会に対して「神のご計画の全体を、余すところなく」知らせた(使徒 20:27)というその内容は、まさに創世記 1 章 3 節の「光」(「オール」אוֹר)についての注解と言えるのです。そして、このことを余すところなく理解して語るためにも、使徒パウロが経験したように、「天からの光」、つまり、啓示(悟り、知恵)の光が必要なのです。「天からの光」による啓示によってはじめて、サウロ(=「シャーウール」שָׂאוּל、「神を熱心に尋ね求める者」のヘブラ的意味)が真のサウロとなったのです。そのことによって彼は「余すところなく御国の福音を語る」ことができたのです。

●使徒パウロはエペソの聖徒たちに「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(5:8)と語っています。ここでの「光の子ども」とは、「明るく、元気で、生き活きと」という意味ではありません。「光の子ども」とは、やみの中から輝き出された光、すなわち、神の永遠のご計画(みこころ、みむね、目的)を悟った者のことなのです。それゆえ、私たちは主にある「光の子」であることを自覚し、その意味するところを深く悟り、それにふさわしく歩んで、パウロのように「光」についてあかしする(論証する)力が与えられるべきであると教えられているように思われます。こうした視点から、「光の子どもらしく歩みなさい」という理解に導かれています。

※5 章 8 節の諸訳

(1)【新改訳改訂第3版】

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

(2)【新共同訳】

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。

(3)【エマオ出版訳】

なぜならば、あなたがたはかつては暗闇でしたが、今は、主にあって光り輝くものであるからです。光の子どもとして歩み続けなさい。

(4)【柳生訳】

あなたたちは、かつては全身これ闇であった、が、今は主と結びつくことによって光となった。だから、光の子らしく生きるがよい。

(5)【岩波訳】

あなたがたはかつて暗闇であったが、今は主にある光なのだから。あなたがたは光の子として歩み、

(6)【バルバロ訳】

元あなたたちはやみであったが、今は主において光である。したがって光の子として歩め。

(7)【私訳】

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもにふさわしく歩みなさい。